

## 「むり」について ①

前回、「おふでさき」では「ことわり」という語句は「道理を知らず」という基本的な意味とともに「前もって事の次第を知らせる」（予告）という文脈で多く使われている、ということを見た。今回は、「り」（理）の否定形の「むり」（無理）についてみていきたい。

まず、第一号の2に「むりでない」とある。

よろつよのせかい一れつみはらせど  
むねのハかりたものハないから (一1)

そのはづやといてきかした事ハない  
なにもしらんがむりでないそや (一2)

このたびハ神がもていあらはれて  
なにかいさいをといてきかする (一3)

この歌群では、「親神の眼から見てその御心を分かった者がいない」と告げたあと、「そのはづや」と初句切れで強調し、「何も知らない」のも「無理ではない」と詠われている。否定（無理）の否定（「ではない」）のかたちであるので、裏返して、「何も知らない」のが道理である。そして、その道理に従って、「このたび」は神が直々に教えを説いて聞かせると述べられている。

次に、三号の6に「むりにこい」とある。

いまゝでハなによの事もハかりない  
これからみえるふしぎあいつが (三5)

こんものにむりにこいとハゆうでなし  
つきくるならばいつまでもよし (三6)

この文脈は、第三号1から4までで「屋敷のそうじ」（余分な建物の撤去）と「心のそうじ」とが掛け言葉的に主題化されており、5で「いままで」と「これから」が倒置的・対比的に詠われている。すなわち、「いままで」は「何も知らない」。一号を参照すれば、それが道理である。しかし、親神が「このたび」その胸の内を説き始めることで、「これから」見えてくるのだ、「不思議な合図」が（ここの倒置的に詠われている）。それを踏まえて、6の上の句で「来ない者」に「無理に来い」とは「言うのではない」と述べられ、対照的に下の句では「（この道に）付き来る」のなら「いつまでもよし（良・善）」と詠われている。

「来ない者」が「何も知らない」「いままでの」者であるなら、「無理に来いと言う」ことは、「親神の胸の内を説かずに来いと言う」ことと解される。

また、七号の91に「むりであるまい」とある。

いまゝでのみちのすがらとゆうものハ  
とふゆうみちもしりたものなし (七89)

これからハとのよなみちもたんへと  
よろづみちすじみなゆてきかす (七90)

月日よりなにもみちすじきいたなら  
このざんねんハむりであるまい (七91)

一号で詠われているように人間が親神の胸の内について「何

も知らない」のは道理である（「無理でない」）が、この箇所では、親神がそのことを「ざんねん」に思うこともまた道理である（「無理でない」）と説いている。

すべて無句切れのシンプルな歌群であるが、まず89で「いままで」の道程がどのような道であったかを知っている者はいないと告げられ、90で「これから」は親神がそうした「いままでの」道筋をすべて説いて聞かせるのであり、91でそれを聞いたなら、親神がはがゆく思っている心も決して「無理ではない」ことが分かるであろうと詠われている。

ここで留意したいのは、七号では「いままで」と「これから」の用法が三号と少し違うことである。三号では、「いままでは何も知らない」であったが、ここでは「いままでの道について何も知らない」の意である。すなわち、「いままで」知らなかった「いままで」の道について、「これから」伝えていくと詠われている。

最後に、十二号に「むりでない」とある。

みのうちにとこにふそくのないうちに  
月日いがめてくろふかけたで (十二118)

ねんけんハ三十九ねんもいせんにて  
しんばいくろふなやみかけたで (十二119)

それゆへに月日ゆう事なに事も  
うたこふているこれむりでない (十二120)

このたびハ此むねのうちすきやかに  
はらすもよふやこれがだい一 (十二121)

この心月日のほふるしいかりと  
つけん事にハどんなはなしも (十二122)

いかなるの事をしたるもみな月日  
こんな事をばたれもしろまい (十二123)

この箇所は、『おふでさき註釈』によれば、教祖の長男・秀司について述べたところである。ここでは、ある種のねざらいの言葉として「いろいろと心配、苦勞、悩みを掛けたので、親神の言葉を疑うのも無理はない」と詠われている。つまり、秀司に関していえば「疑う心」があるのはある意味で道理であるといわれる。

しかし、続いて「このたび」は、その「疑う心」を晴らすことを第一の課題とすると詠われて、そうした心を晴らさなければ、どんな話をしても甲斐がないことが告げられている。つまり、親神に理由があつて秀司に苦勞を掛けたという意味で、秀司の苦勞は道理であり、それによって疑う心が起きるのも道理（「無理でない」）であるが、それゆえにこそ、その疑いの心を晴らすのもまた道理なのだといえよう。そこで、すべてにおいて「理」があり、どんなことも親神の働きに拠るということを「誰も知らないだろう」と123で詠われている。

次号では「みかぐらうた」における「むり」の用法と比べながら考察していきたい。